

〔岐蘇路記〕上是○野板より七八町下りて木曾の棧あり、木曾川に掛たる橋にはあらず、山の岨道の絶たる所に掛たる橋なり、右の方は木曾川の際なり、横二間、長十間ある板橋なり、欄干あり、兩旁は石垣を築く、昔は危き所なりけらし、今は尾州君より此橋を堅固に掛玉て、聊危きことなし、

〔芭蕉文集地〕更科記

懸橋寢覺など過て、猿がはしたち峠などは、四十八曲りとかや、九折重りて雲路にたどる心地せらる、歩行よりゆくものさへ眼くるめき、たましゐまほみて足定らざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそる、氣色みえず、馬の上にて只ねぶりにねぶりて、落ぬべき事あまた、びなりけるを、跡より見あげてあやうき事限りなし、佛の御心に衆生の浮世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも、我身にかへりみられて、○中

かけはしやいのちをからむ薦かづら  
 かけはしやまづおもひいづ駒むかへ  
 霧晴てかけはしは目もふさがれず

越人

〔木曾路名所圖會〕三木曾棧舊跡驛路の中にあり、いにしへは山路險難にして、旅人大に苦む、慶安元年尾州敬君より有司に命じて、棧道を架す、長五十六間、横幅三間、四尺、又寛保年中同邦君また有司に命じて、左右より石垣を數十丈築上、棧道を除き、今往來安穩なり、これを波許橋といふ、長纒三間許、聊危き事なく、橋下の石に銘あり、

此石垣慶安元戊子年六月良辰成就焉畢  
 又寛保元年辛酉十月吉辰

〔胡蝶庵隨筆〕余○南華往年關東の諸國を遊歴せし時、木曾終を通りけるに、棧といふ所を見れば、道の傍に大なる芭蕉が石碑あり、

〔北禪文章〕四譯一紅上野大變記